

日本語教育インターンシップ 派遣および受け入れの成果と課題
 ACHEIVEMENTS AND CHALLENGES OF SENDING AND ACCEPTING A
 JAPANESE TEACHING INTERN

伊藤（横山）美紀, 北海道教育大学函館校
 Miki Yokoyama Ito, Hokkaido University of Education Hakodate
 児玉 陽子, カルガリー大学
 Yoko Kodama, University of Calgary

1. はじめに

本稿では、第一筆者の所属する日本の大学で日本語教員養成プログラムを履修している学生が第二筆者の所属するカナダの大学に日本語教育インターン（以下、インターン）として派遣された際の成果と課題を、派遣側担当教員と受け入れ側担当教員の双方の視点から考察する。本稿で扱うインターンシップは海外協定を結んでいる大学間での実施であったが、インターンとしての学生派遣は初めての試みであり、派遣前手続きから現地での受け入れまで、試行錯誤が多い派遣であった。本インターンシップは2015年の9月2日から同年12月14日の約3か月半に渡り実施した。本インターンシップ終了後、派遣側指導教員からインターンに対して、インタビューを行った。そのインタビュー結果も考察の対象とする。

2. 日本語教育インターンシップ実施にむけての準備

北海道教育大学函館校（以下、函館校）では、2014年4月に「国際地域学科」が新設された。本学科では「日本語教員養成プログラム」を設置している。本プログラムの必修科目で学生は、まず国内外の日本語教育の現状に対する理解を深め、多様な外国語教授法を学ぶ。その後、模擬授業と振り返り活動を通して実践力を身につける。「日本語教育支援実習」では日本国内の日本語教育現場に参画することによってこれまでの授業で学んだことと現場との関連を学ぶ。「日本語教育文法」では日本語を客観的に捉える力を養う。これらの科目を履修した学生が本インターンシップにエントリーできる。本インターンシップを終えた学生は、「海外日本語教育インターンシップ」という科目の単位を取得することができる。

2015年5月に函館校において派遣説明会を行い、同年6月にインターン候補の選考を行った。派遣人数は1名である。候補となった1名のインターンは、クレジットカードの取得の他、カナダへの入国手続きのために、日本語と英語のバイリンガルによる履歴書を作成した。派遣側の指導教員はその履歴書の作成指導を行った。インターンは、カナダへの入国準備と同時期に大学寮の申請を行った。その後インターンは、渡加までの3か月間に渡り、使用教科書の範囲の予習を行った。特に、英語で説明されている部分の内容理解を重点的に行った。

本インターンシップは、国際交流基金の「国内連携による日本語普及支援：海外日本語教育実習生（インターン）派遣」の助成を受けて実施した。これにより、往復航空賃、住居費、海外旅行損害保険料の一部が支援されている。

3. 日本語教育インターンシップ実施内容

インターンは、週3回、多様なレベルの日本語クラスに参加した（表1）。はじめは見学を行った。その後、アシスタント活動を行いながら、授業のための教材作りや授業の一部の担当時間を徐々に増やしていった。インターンは、クラス内では、出欠確認や配布物・回収物の確認を行った。クラス外では、作文の添削、漢字・語彙学習のサポート、漢字クイズや教材の作成、同クイズの採点・入力、宿題の確認等のアシスタント活動を行った。インターン期間の終盤では、仕上げとして実習授業を行った。実習授業では、現地指導教員の指導のもと、インターンがクラス1回分のすべてを行った。

表1 現地週間スケジュール

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
9:00	J205-02		J205-02	J205-02	J205-02
10:00					
11:00	J331-01		J331-01		J331-01
12:00	J331-02		J331-02		J331-02
13:00	J301-01		J301-01		J301-01
14:00	ミーティング		ミーティング	チュートリアル	ミーティング
15時以降		チュートリアル	クラブ活動・チュートリアル		カルガリー日本語学校見学（19時）

インターンは、日本語クラス以外の活動にも積極的に参加した。表1にある通り、毎週金曜の夕方には、地域の日本語学校を見学した。また、日本文化紹介も複数回にわたって企画し、実施した。アルバータ州の日本語教師会への参加や、日本領事館主催イベントボランティアとしての活動も行った。

4. 成果と課題

本節では、本インターンシップの成果と課題について考察する。

4.1 成果

まず、派遣側からの成果を、日本語クラス内、日本語クラス外、学外の3つの場から述べる。

インターンは日本語クラス内で様々なことを学んだ。まず、日本の大学とカナダの大学の違いを肌で感じる事ができた。インターン自身もこれが非常に有益であり、本インターンシップの最大の魅力であると帰国後に述べている。「学生が楽しめる授業」を考え、実践する重要性は、渡加前の日本での授業で指導してはいたものの、やはりこの点について実感し、行動に移すためには、現場の力が必要であると考えた。また、文化紹介では、自身が日本文化を発信する立場になり、日本の文化に対する現地の学生のリアクションを体験することができた。現地指導教員の指導により、文化紹介活動を通して企画力も向上した。

また、インターンは1名であったこともあり、複数の実習授業を行うことができた。文化紹介も2度行った。このような環境はインターンが成長するために有効であると考えた。表2はインターンの2度の実習授業による変化、表3は2度の文化紹介による変化を、インターンへのインタビュー結果からまとめたものである。インターンは、表2の日本語クラスと表3の日本文化紹介のいずれにおいても

でも1回目は説明が多く、インタラクションが不足していたが、2回目は、学生とのインタラクションを増やしている。いずれにおいても一度目は、聞き手が理解したかどうかの確認が不足していたが、2回目は質問をしたり、学生の活動を早めに取り入れたりしている。

表2 インターンによる2度の実習授業の振り返り

1回目の実習授業 (J331-01、少人数クラス)	⇒	同レベル別クラスにおける2回目の実習授業 (J331-02、多人数クラス)
テンポ悪かった ※反応を気にしすぎた。 ※次の授業ではどうしようか考えた。	10分休憩後	声のトーンをあげた 自分からウォームアップで積極的に笑った。話しかけた。

表3 インターンによる2度の日本文化紹介の振り返り

1回目の文化紹介 (伝統芸能)	⇒	2回目の文化紹介 (書道)
うまく話せなかった。使う英語を間違えた。		テンポよくできた。学生の反応をみた。 ※「やったことありますか」というような質問をなげかけた
こちらからの情報量が多くて一方通行になった。		活動にメリハリをつけるようにした。 ※体験1→レクチャー→体験2という流れにした。 ※「できない→できる」という流れを目指した。 ※これらは、「ただ話すだけじゃだめなんだ」という思いからやってみた。
全部きかせてから工作をした		※1回目と違って、楽しみながら準備できた。
テンポが遅かった ※わかったかどうか不安で遅くなった。		
紹介映像が長すぎた(2~3分)。		

インターンは、日本語クラス外でも貴重な経験をした。その例として、TA workshop (ティーエー・ワークショップ) への参加を挙げる。TA workshop では、学期のはじめに日本語クラスだけでなく多様なクラスのティーチングアシスタント (以下、TA) が集まり、TA を行うにあたっての心構えや技術を修得する。インターンを始める前にこのワークショップに参加し、カナダの大学での教育の制度や現状について学べたことは貴重であった。

インターンは、大学の外でも学んだ。インターンは、地域の日本語教師会に参加し、そこで日本語教育に関わる多様な人々と交流し、多くを学ぶことができた。また、市内の日本語学校に継続的に観察に行き、そこで幼児から成人までの幅広い年齢層に応える地域の日本語教育、また外国語としての日本語だけではなく継承語としての日本語の教育現場を観察する貴重な機会を得た。さらに、市内の公立チャータースクールの中学部の日本語のクラスで授業観察や文化紹介を行い、大学以外の公立教育機関での日本語教育の現状を垣間見ることができた。

次に受け入れ側から考察する。受け入れ側は負担が大きかったものの、本連携を通して以下の4つの「つながり」を作れたことが大きな成果であった。

1つ目は、「現地学生とインターンのつながり」である。このインターンシップを通して現地学生とインターンは互いの言語、文化、生活について学び合うことができた。特に現地学生は、同世代の日本語母語話者との対話を通し、日本語だけでなく、日本文化や日本の生活様式や日本人の考え方を知り、体験すること

ができた。また、現地学生がインターンの世話役を務めたり、学外での文化研修の際にガイドをしたりすることにより、より深いつながりができた。

2つ目は、「受け入れ大学とインターンのつながり」である。幸いなことに、今回は、受け入れ側の大学が学科全体でインターンを好意的に受け入れた。これにより、充実したインターンシップを実施することができた。

3つ目に「受け入れ大学の学生と日本のつながり」を挙げる。インターンとの交流により現地学生の日本へ興味関心が高まったのは言うまでもないが、ここで一番強調したいのは、今回、国際交流基金と連携した日本語教育インターンを受け入れたことにより、カルガリー大学の学生1名が6週間の訪日研修に招待され、参加することができたことである。これは毎年確約されているものではないが、年によっては、受け入れ大学の日本語の学生が翌年、国際交流基金による日本での日本語学習者訪日研修に参加できるというものである。このような機会は受け入れ大学にとって非常に有益である。

4つ目に「自己とのつながり」を挙げる。インターンの受け入れにより、現地指導教員は日頃の教育活動や自己の教育信念を知り、それを振り返る機会、すなわち自己を見つめる機会を与えられた。現地学生やインターン自身もこのインターンシップで多文化に遭遇することにより、自己を見つめる機会が多々生じたと思われる。

4.2 課題

次に、課題を述べる。インターンに「カナダに行く前にもっとやっておけばよかったと思うこと」を尋ねたところ、2点の回答があった。1点目は、英語の勉強である。特に日本語教育現場でよく使う語彙と文法用語を予習しておくべきだったと回答している。英語の重要性を事前に十分に認識できていなかったと思われる。次期の事前指導では、英語の指導にさらに力を入れる必要がある。2点目は、自分ができそうな文化紹介の準備をもっとしておくべきだったという回答である。具体的には、使えそうな道具や写真を持参することと、英語での説明を準備しておくことである。これも次期の事前指導に取り込みたい。

また、今回が初回であったため、現地でのタスク量の調整が不十分で、インターンに対する負荷が大きすぎた可能性がある。インターンにとって非常に勉強になったことは事実ではあるが、実習記録や観察ノートにおいては、担当教員によるフィードバックの質の保証のためにも、書く量を制限するのが一つの方法である。また、インターンと現地指導教員間でお互いの見通しを立てるために、インターン期間全体のスケジュールをインターンシップ開始前に共有することを計画したい。インターン、現地指導教員の双方が見通しをもつことで、より自律的なインターン活動が期待できる。インターンの生活支援においては、インターン世話役の現地学生などのさらなる活用を考えたい。

5. まとめ

今回のインターンシップを通して双方間においてまたそれぞれの大学内において多様なつながりが築かれた。これらのつながりは非常に貴重な存在であり、今後のインターンシップを向上させる大切な基盤となると思われる。派遣大学にと

っては、インターンが海外の日本語学習現場での様々な取り組みを目の当たりにできたことと、学習者とのインタラクションを適切に行いながらクラス運営をしていく重要性を実感できたことが大変有益であった。また、日本語クラス外でも現地の日本語プログラムの学生代表たちと交流をする機会が豊富にあり、相互理解が深まったと思われる。受け入れ大学にとっても、インターンの出身地の伝統芸能についてのユニークな文化紹介、さらには日本の最新情報や若者ならではの斬新なアイデアなどの共有が、現地学生の日本語学習におけるモチベーションの向上につながったことが有益であった。

今後、派遣大学側では、渡加前に現地の日本語プログラムの内容をインターン候補により効果的に理解させ、事前準備をさせることが課題である。受け入れ大学側では、今回の実施経験を基にインターンのタスク量を調節しながら、インターンの自律的問題解決活動を促すような実習指導を計画し、導入していくことが今後の課題である。

付記

本インターン派遣は、国際交流基金「国内連携により日本語普及支援：海外日本語教育実習生（インターン）派遣」から助成を受けました。